Salamander in the circle

第八章

Aritiya

峯村　明

Salamander in the circle

登場人物

マミヤ・・・・・・・ホシナ族の娘
イリチヤ・・・・・・ヒューダーが名付けた少年
ヤスウ・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団員
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・　　〃　　・王女
コタエ・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官
スクナ・・・・・・・コタエの兄
パンテオラ・・・・・メッサナ市の総督
コモラ・・・・・・・総督の顧問
ベネトナシュ・・・・死神

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・　　〃　　団員
ホシナ・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父
オマキ・・・・・・・ホシナの妻
ゴン・キト・カボ・・ホシナ族の男たち
パウル・・・・・・・ケストル王国・国王
ウルリク・・・・・・　　〃　　・第三王子
ヘンリク・・・・・・　　〃　　・ウルリクの息子
ソルド・・・・・・・　　〃　　・警備隊長
サノヒコ・・・・・・島の王に仕える役人
バイスロイ・・・・・黄金門の皇帝の息子
バラム＆バランケ・・双子のジャガー。パンテオラの部下

目次

イリチヤ
130.
131.
132.
133.
134.
135.
136.
137.
138.
139.
140.
141.
142.
143.
144.
145.
146.
147.
第八章のあとがき
奥付

イリチヤ

130.

「喰われただと……」
「はっ」
「確かめたのか」
「ワニの巣の真ん中に衣装の切れ端が浮いておりました。あのような場所で無事に済んだとはとうてい考えられません。ですから……」
「喰われたというのか」
「は」
「……」

　相手がいつまでも無言なので、カラスはおそるおそる顔をあげて様子を伺った。かなり時間が経ってから、相手は口を開いた。「何故」、と。
「――は？」
「何故、追い詰めた。進退窮まり、猛獣の群れの中へ入っていくしかない、娘にはそれしか選択肢がなかったと、言わなかったか」

　その言いようはとてもおだやかだったので、相手は詳しく知りたいのだと、カラスは感じた。そこで、おもねるように相手の言葉を繰り返して応えた。

「進退窮まり、猛獣の群れの中へ入っていくしかない。助けはどこからも来ない。なぜなら、あらゆる選択肢、救いの芽はこの私が端から摘み取ってとり除きましたゆえ。そ

こまで追い詰めてこそ、でございます。肉の身を持つ人間にとって最大の恐怖と絶望とは、そう認識した瞬間に襲いかかります。その瞬間の心の動きは同胞である人間たちにとってもまた恐怖そのもの。追う側も、追われる側も、思う存分、生涯忘れられないほど、恐怖に浸り、味わう。それには追い詰めてこそ、でございます」
「残酷な」
「おお。この恐怖の重いエネルギーこそご主人さまに必要なものではございませぬか。そのために忠実なしもべである私はどこまでも残酷な存在となりましょう」
　カラスは嬉々として応え、翼を膨らませた。

「そのような必要は、なかった」

　意外なお言葉だった。カラスの膨らみかけた翼は中途半端な形で凍りついた。「なんと、仰せられましたか」

「追い詰める必要などなかったと言ったのだ。もう一回聞きたいか。追い詰める必要など……」

「こっ、こここここっ」

「お前はニワトリか」

　カラスはごくりと唾を飲み込んだ。もしかしたらご主人はご機嫌が悪いのではなかろうかと、ようやく気がついたのだ。

「こ、これは異なことを！　私は人間どもの恐怖を最大限に増幅させ、放出させるためにこれ以上の方策はないと確信して……」

「だからそのような必要はなかったのだと、何回言わせる気か」

「さ、三回？」

「四回だ！　よいか！　あの娘はメッサナにあってきわめて影響力のある人間だった。だから『贄』として選んだ」

（はあ……影響力でいうなら、パンテオラ総督の方がよほど……彼女が髪型を変えれば次の日にはご婦人方はいっせいにおんなじ髪型をしてる）

　カラスがこっそりもらした口中のつぶやきがご主人に聞こえたのか。

「総督の持つ影響力など政治的、もっといえば行政上のものにすぎぬ。しかし、芸術家は違う。芸術家の力は人間の魂に働きかける。魂を揺さぶり、魂の波動に干渉するのだ。そのようなわざは、余に匹敵する。だから人間どもから取り上げねばならなかった」

　まさか冥界王から芸術談を聞かされようとは思わなかった。

131.

　カラスはどう答えていいかわからず、それでも懸命に考えた。「ですから……最大級の恐怖と共に取り上げた……のですが」おそるおそるつぶやく。
そこまではご主人の意向と合致しているはずなのだ。

「それを殺してしまってどうする」

「――殺しちゃ、いけなかったんですか！？」

「あの娘は、いってみれば、種だったのだ。綿毛のついた種を想像してみよ」

　カラスはしかたなく、嫌々、その光景を想像する。陽光を浴びて陽に向かって咲く金色の花々。光に満ちた平和な緑野、その空でひばりがせわしなくさえずる。こっそりと死角から襲いかかって恐怖の悲鳴をあげさせ、羽と血を花々の上にまき散らせたい衝動をぐっとこらえ、金色の花が実を結び、白い綿毛となって温風とともに青空に舞う。これほどイヤなイメージもない。彼はげっそりと考える。光に満ちた世界を想像しただけで消耗しきってしまうのだ。ご主人はそれをよーくご存じのはずなのに、「想像してみよ」と仰せられる。まるで罰ゲームだ。

　カラスの思惑とは関係なく、青空に舞った綿毛は風に乗って飛んで行く。

　一緒に旅立った仲間たちはやがて散り散りになってしまったけれど、飛ぶ力を失って着いた場所で、眠り、目覚める。種は土の中で新しい生命となって目覚めるのだ。そして陽光を浴びて成長し、花開き、また実を結び、綿毛と共に旅に出る――

　で？　というのがカラスの思いである。それがなにか？

　いつもならご主人さまのお心の動きに極めて敏いカラスなのだが、心休まらない光景を想像したことで疲れ切ってしまっていた。姿勢を取り繕うこともできず、暗色の床にべったりと平たくなっていて、空気が電気を帯びてびりびりとしてきたことに気がつかない。

132.

「あの娘も、支援者らも、放っておけばどこまでも行くことができた。魂の中に恐怖と猜疑心を抱えた、黒い種としてだ。そして行き着いた先で根付き、花を咲かせ、また実を結び、新たな土地を求めて旅立つ。しかし咲く花も、結ぶ実も、すべてが黒い」

「……」

「放っておけば、それが可能だった。あの娘、あのような影響力を持つ芸術家はそうはいない。希少な種子だったのだ。労せずして地上世界を黒い花で埋め尽くすことができたのだ――それを――お前はわざわざ芽のうちに摘み取ってくれた――」

　ご主人の声音は相変わらず穏やかなものだっただけに、カラスは鳥肌立つような殺気を覚えた。そういえば空気がきな臭い。策を弄してこれでもかと娘を恐怖に陥れ、追い詰めたことは、ご主人の意にそぐわないことだったとは考えもしなかった。その上、ご主人の遠大にして細心緻密な計画を、得々と潰してしまったとは――

　とにかく、平伏しなければと、カラスはぺしゃんこになるほど床にへばりついた。まるで、鳥型のシミのように。

「余はお前の力を評価しておる」

　思いがけなく下されたお言葉にカラスは思わず顔をあげた。

「余の思いもつかぬようなことをしてのける。娘はワニに喰われてしまったかも知れぬが、メッサナに蒔かれた不穏の種はそのままだ。その種を育てるがよかろう。ひょっとしたら――無防備にして難攻不落といわれたあのメッサナが、わが手に――」

　行いを完全に否定されたわけではなかった！　カラスは他愛もなく歓喜に震え、欣喜雀躍し、いきなり本来の姿に戻ってしまった。カラスの姿の方がまだ可愛げがあるなと、冥界王は無表情に考えている。

（こやつは……陰でこそこそと巨人族を操っていることを、余が気づいていないと思っているようだが……いや、知らぬ存ぜぬとかわすつもりでいるのか。まあ、よい。何にしても、巨人族はこやつの手にはあまる。いずれ、助けてくれと、余に泣きついてくるのがオチというもの。それまでは知らぬふりをしてやろう……）

　大鎌を担いで恭しく退場するベネトナシュを冷たい目で見やりながら、なおも冥界王は無表情に考えている。

（夜半にワニに喰われて死んだ？　そんなはずはない。余が一瞬の歌声を聴いたのはもっとあと、それも違う時間帯であった。しかも……あの声は……）

　その声はメルノにしてメルノのものではなかったのだ。

133.

　エウメロス空軍所属の操縦士は困ってしまった。

「メッサナへの帰り方を教えてやってくれないか」と王室付き近衛隊長に頼まれたからである。

（翼竜に？　メッサナへの帰り道を？　教える？　こっちが聞きたいですよ！！）

　口中でそう文句を言いつつ、殊勝に、「やってみましょう」と請け負った。険しい山脈の上空で墜落する機から助けてくれたのはその翼竜だったのだから、まさに命の恩人なのである。恩を仇で返すなんてのはケストル人ならやりかねないが、エウメロス人の信義にはもとることなので、操縦士は困惑しつつ、懸命に考えた。現在地とメッサナとの位置関係、大陸上空の気流、etc。

　考えに沈みながら翼竜本人をつかまえて聞いてみることにした。「メッサナからここへ、どうやって飛んできたんだい？」
　翼竜はちょっと考えて答える。「どうやってって……マミヤに呼ばれたから……飛んできた」
「だから……どこをどう飛んできたのか知りたいんだ。地表の様子を見なかったのかい？　おそらく、湖沼地帯とか砂漠地帯とか、あったはずなんだが」
「そんなの見てないよ。体が勝手に飛んでくれるもの」
「そりゃ便利だ、いやいや、もう少し詳しく話してくれないか」

　地図の類を持ち出せなかったことを操縦士は悔いたが、無いものは仕方がない。記憶をたどってみると、メッサナは現在地のほぼ真南にあるのではないかと思われた。彼は

翼竜と話し込み、やがてばったりと草地に身を投げた。そして気がつけば近衛隊長が心配げにのぞき込んでいた。

「やあ……。どんなだ？　大丈夫そうか？」

　疲れているだろうからそのままでいい、という近衛隊長の言葉を真に受けるわけにもいかず、操縦士は起き上がり、背筋を伸ばす。近衛隊長と膝を突き合せる格好である。

「ええと。メッサナからここへどうやって飛んできたのかと彼に聞いてみたんですが……ただ空の上へ向かって飛び立ち、空気の流れに乗って降りたらここだった、と。ええ、ずいぶん適当な話だと思いましたよ。しかしね、問題はこことメッサナがほぼ南北の一直線上にあるということです。隊長どのは、大気循環というのをご存じですか。自分は、操縦訓練の一環としてそういうのをいやというほど叩き込まれました。ざっと説明しましょう。

　――赤道付近で暖まった空気は上昇し、大気上層、高いところを北へ移動する。次第に冷やされた空気は北緯30度あたりで下降し、地表付近では逆に南へ、赤道方向へ移動する。これがひとつめ。
　ふたつめ、北の極では冷たい空気は下降し、地表で南へ動く。地表の北緯60度あたりで南から来た空気とぶつかり、上昇気流が起こる。上昇した空気は大気上層を北へ向かって動いていく。
　ひとつめの、北緯30度あたりに発生した下降気流によって、地表では北への流れができます。この空気が北緯60度あたりで北から流れてきた空気、つまりふたつめとぶつかり、上空へ上がっていきます。これがみっつめです――」

　操縦士は腕を高くあげて北の方角を指さした。

「北緯60度付近の上空の大気は、上昇気流に押されて南へ流れていき……」

　北をさしていた指は彼の頭上を越えて南へと大きく弧を描く。

「そして南から流れてきた大気と30度付近でぶつかり、地表へ降りていきます。上層と下層で南北に動く大気の流れがある。だいたい、緯度30ごとに上層と下層とで逆の動きになっているんです。

　彼は……翼竜は大気循環の流れに乗って来ただけなんですよ。メッサナを飛び立って頃合いを見計らって……どういう頃合いなのかわかりませんが簡単に見分けがつくらしい……まっすぐに下降すれば自然にここへ着くんです。だから帰りも同じ、ここを飛び立って高いところまで出て頃合いを見計らってまっすぐに下降すればメッサナに到着するという寸法です。空気は逆に動いているわけですから。

　まあ、見たところ、彼は体が軽そうですからね、航空機だったらそんな真似はできないでしょう。大気循環といっても大きな気流があるわけじゃありません。大気というよりは、熱の循環、と言った方があたってるかもしれません。彼によると、このあたりでは地表の熱は北の方角へ流れているそうですから、みっつめの流れのどこか、おそらく北緯45度くらいじゃないでしょうか。ということは、上層では南へ流れているはず」

　真剣に耳を傾けていた近衛隊長がふと目を見張ったのを、操縦士は見逃してしまったが、こう締めくくった。

「彼は本能で空を飛んでいる。そういうことですよ」

134.

「とんでもないところまで、来てしまったもんだね」

　近衛隊長に言われてイリチヤは、たしかに、と思った。世界の果ての島から別々の地を目指して旅立ったのに、近衛隊長は彼の母国経由で、イリチヤはメッサナ市経由で、今、ケストル-エウメロス国境の山岳地帯にいる。

「きみが駆けつけてくれたおかげで、王女殿下始め、全員が助かった。改めて礼を言わせてもらうよ」

「ヒューダーは……」

「うん？」

「ヒューダーはずっと僕を子供扱いしてた。でも、ある時、言われたんだ、おまえの役目は地上にある、って。それで僕は、なにか起こったらなんとかしてみせると約束した」

　イリチヤの手の中に短剣がある。黒曜石の短剣。近衛隊長はそれに見覚えがあった。マミヤの同郷の男が、その短剣とともに彼女の救出をヒューダーに託したのだ。
　何とも言えない思いで、近衛隊長は手を差し出す。イリチヤはその手に短剣を乗せる。黒く、半透明で、軽い。しかし、わずかな力で動物の肉体をいとも簡単に切り裂いてしまう鋭さである。

　いきなりイリチヤが言った。「あのさ、それ、もらってくれないかな？」
「え、いやしかし、大事な物だろう！？」

「うん〜、マミヤを助け出すために預かったものだから、マミヤにやろうと思ったんだ。けど……マミヤがふくざつな顔するんだ。ゴンの気持ちはありがたいけど、気持ちだけでいい、って。マミヤにとって黒曜石っていうのはひどく神聖なものなんだよ」

（そういえば、イリチヤが黒曜石のカケラを使ってダイダラボッチを傷つけたと誤解しかけて、彼女はえらい剣幕で怒ってたっけ）

　世界の果ての島の王とマミヤのホシナ族との間には黒曜石を巡って神聖な契約があったのだ。

「そうか、そういうことなら……」
　近衛隊長は自分の持ち物の何かを代わりにやろうと制服のあちこちを探ったが、あいにく、たいした持ち合わせがないと気がつく。

「レル、これを」
　傍らから差し出された手のひらに、指輪がのっている。

「殿下」

　朝日の中で、ヘルガ王女はにっこりとほほ笑む。きれいに結いなおされた金髪がつややかに輝いている。彼女は近衛隊長を見、それからイリチヤに向かい合った。

「わたくしからの礼です」

　それは不思議な色合いをしていた。それほどの太さはないが精巧で立体的な彫刻がされていて、深い緑色と金色との間を揺れ動いているように見える。

「以前、父がメッサナの職人から買い取って、わたくしが譲りうけたの。父は個人的にメッサナの学生や職人を支援していたのです。みごとな細工でしょう？」

　たしかにみごとな彫刻で、イリチヤはうっかり手にとり、朝日にかざして見とれた。
「きれいだねえ……」

「メッサナ市へ戻るなら、ちょうどよいと思うの。なにかの力になるかもしれないわ。どうか受け取ってちょうだい」

　すっかり気に入ってしまったイリチヤは面映ゆそうな顔で、うなずき、指に嵌めてみた。小さな指輪だったが、白い髪と白い衣装、紅色の瞳の彼に、なんだかよく似合うな、と近衛隊長は思った。

　メッサナの無名の職人が硬い金属を加工して作り上げたその指輪の真の価値は、彫金の腕前でも、彫刻の出来栄えでもなかったのだが、誰も知らなかった。
今はまだ、誰も。

135.

　そしてイリチヤはマミヤを背に乗せて南へと飛んでいる。もっとも、離陸前に操縦士からこんこんとレクチュアされた。いわく、「いいか、調子に乗ってあんまり高いところまで上がるんじゃないぞ、人間を乗せるんだから」
「大丈夫だって。落っことしたら受け止めに戻るから」「そういうことじゃない！　あ

んたはどうか知らないが、人間は空気を吸わないと死んでしまう！　高いところはその空気が薄いんだ！　まじめに聞け！」「……わかった」「本当にわかったのか？　あとで経過と結果を報告してもらうぞ」

　近衛隊長といい、操縦士といい、律儀で生真面目、任務は完璧に遂行せずにいられないのであった。

＊

「こわくない？」

「平気よー」
　マミヤは怖がるどころか楽しそうだ。もともと、好奇心の強い性格なのだ。エウメロスの航空機に初搭乗したときは外を眺めるどころではなかったが、今はヒューダーのいる地に向かっているという期待と希望に溢れていた。目をきらきらさせ、興味津々であちらこちら眺めている。

「寒くない？」

「ぜんぜん！　おまえの羽の中、あったかいもの」

　レルはそのことを不思議がっていた。イリチヤはついこの間までイモリだった。イモリは周囲の熱に左右される変温動物のはず。一方、この巨大な翼竜はちゃんと温かい。なぜ？　と。
　スクナもまた珍しげに眺め、触ってみている。「うーむ……それは……アキツに似ておるかもな」

「アキツ？」、とレル。
「うむ、トンボだ、我が国には大量にいて、秋になると空を真っ赤に染めるほどだ」、と、親指と人差し指の間をちょっと広げて大きさを表す。「トンボの幼虫は水中で育ち、成長すると翅を使って自由自在に空中を飛びまわるようになる。こいつもそういうことなのではないか？」

　幼生期を変温動物として水中で過ごし、成長すると恒温動物化するということらしい。生物としての性質がすっかり変わってしまうのだ。
　ゆえに、イリチヤが初めて翼竜に変身した第三章には『変態』というタイトルがついているのである。けっしてべつの意味ではない！！

　スクナの横でコタエが黙って兄のいうことを聞いていたが、胸中ではこう思っていた。
（それにしたって、イモリから翼竜って、ずいぶん極端だこと）
　とはいえ、イリチヤの真の姿、本質が翼竜であることはコタエがいちばんよくわかっている。王家の鏡に嘘偽りは映らないのだから。
（いったん大人になってしまうと人間の姿と自由に行ったり来たりできるのね。円環にはもう縛られないということかしら。それとも、単に、ご都合主義？）

　コタエのドライな詮索はさておき、イリチヤはマミヤを背に乗せて南へと飛んで行く。

136.

「これは――まずいかも――」
「どしたの？」
「空気の横の流れが強い！　変だな、行きはこんなことなかったのに！」
「なんだか雲行きがあやしくなってきたわ――嵐じゃない？」
「みたいだね――」

　イリチヤは踏ん張りながら懸命に考える。行きのルートはもっと高い所を飛んでいた。ある程度の高度以上になると、気流の影響などまったくないのだが、そこでは空気が薄すぎて人間が生きていられない。だから操縦士は口を酸っぱくして高い所へ上がってはいけないと言い続けた。しかし高度を落とすとこんなふうに嵐に直面したりするわけだ。「万が一、そうなった場合はだな――」

　考える間にもみるみる雲が厚く、重くなってくる。「――とにかく地表に降りて嵐をやり過ごす！」イリチヤは操縦士の言葉を複唱した。
　しかし下降してみると、地表には大雨が叩きつけていた。翼竜は体が大きい分、雨の中を飛ぶには限度があった。着陸地点を探そうにも、まだ朝の時間帯のはずなのに光量は乏しくあたりの様子がまるでわからない。

「見て！あそこ！」マミヤがイリチヤの背から右下の方を指さす。「大きな岩がいくつもあるわ、あそこの陰なら雨宿りできるんじゃない？」

　岩は積み重なって大小の隙間を作っていた。「ここなら、ふたり入れそうよ」適度な大きさの隙間を見つけたマミヤは変身を解いたイリチヤを呼ぶ。隙間は地面から1メートルほどの高さにあって雨風をしのぐことができそうだった。岩の地面はすでに降った雨が川のように流れていた。

「ちょっと狭いわね」マミヤは笑った。「あんまり広いと、蛇とか大きい動物とか、先客がいそうだよ。こんな嵐だもん」「蛇は勘弁だわー」「だよね」

なんだかんだいいながらイリチヤは何もないところに火をおこす。しかもこの火は物を燃やさない。酸欠の心配も火事の心配もいらない。熱だけなのである。ふたりはその火で濡れた衣服と体を乾かした。

マミヤにはイリチヤが自分と同じくらいの年齢に見えるが、彼の方が少しばかり背が低い。そのせいか、弟のような気がしてならない。

エウメロスのレルにも弟のような気がしてならなかったものだが、それはレルが彼女より三つばかり年上で長身で男前で異国の王室近衛隊の制服に隙なく身を固めていたにもかかわらず、性格のせいだったかもしれない。妙齢の美女を前にへりくだって距離を置いている彼になんだかいらいらもやもやを感じてしまうのである。

「それは……ヘルガ様は王族でレル様はお仕えする身という構図があるのですから、仕方がありません」とコタエはいう。

「そうかしら」とマミヤは頭をそらせる。「そういう構図がなくったって彼は変わんないと思う。あたしは見てると、どーしたって、もやもやっとくるのよ」

「まあ、私もそう思わないでもないですが」

「でしょう！？」

*

「なに思い出し笑いしてるの？」イリチヤがふしぎそうに聞く。岩間の狭い空間を柔らかな光が橙色に染めている。

「なんでもないわ。ああ、あったまったせいかしら、眠くなって……きちゃった……」

つぶやきながらマミヤはうとうとし、隣のイリチヤに体ごともたれかかって寝息をたてはじめた。

137.

　奇妙な言葉を話す人々が、奇妙な装束をまとって、せかせかとあるいはゆったりと、行き交っている。

　天井は高く、空恐ろしいほど高く、四囲の壁の前の広い通路をあるく人々、また斜め下への階段に乗ってそのまま運ばれていく人々、さらにその下へ向かう移動階段……いったい何階層あるのか……どこもかしこも人だらけだ。マミヤはこんなにたくさんの人々を目にしたことがない。それも人が造ったらしい構造物の中だ。話に聞く王の宮殿だろうか。
　それにしては……ある人は開放的で、ある人は緊張気味で、低いさんざめきに溢れている。
　ぼんやりと歩いていると正面から来た人とぶつかりそうになった。その初老の婦人はマミヤに向かってにこやかに何事か言い、横に避けて行ってしまった。マミヤ自身もごく自然に笑顔になって、さらりと何か言った。他人と正面衝突しそうになる状況などマミヤは知らないのに、一方で慣れてもいるようだった。

　人の間を歩いていくと、広い場所に出た。壁の一面が透明で、外の風景が見えるのだ。そこにある物は……知ってる、航空機だわ……

　ああ、とマミヤは得心する。ここにいる大勢の人たちはあの航空機に乗ろうとしてるんだ……

航空機はひっきりなしに飛び立ち、また、やってくる。人々と物とが、そうやって行き交っている。離着陸の際、凄まじい音が発せられ、透明な壁を震わせる。マミヤが知っている航空機も音を発してはいたが、こんな爆音ではなかった。彼女はそこまでは知らなかったが、動力源の違いのためである。

マミヤは問う。あたしはここで何をしているの？

透明な壁の前で外を眺めている一団の中に、知っている人がいた。その人が振り返り、マミヤを見た。真っ黒な瞳。黒曜石みたい、とマミヤは思う。
その人は、「どうかしたのか？」と聞いてきた。別に心配しているようでもない。黒い目も、口調も落ち着いている。
マミヤは首を横に振って言った。「ううん、忘れ物がないか、思い返していただけよ」
「大事だな。この前はパスポートを忘れたからな」

真っ黒な瞳に真っ黒な髪のその若い男はひとりではなかった。左の腕に幼児を抱えていた。その幼児がマミヤを見、男を見上げてたどたどしく言う。
「ママ、だいじなもの、わすれたの？」
「忘れ物はないわよ」
「ぼくのことも？」幼児の瞳も真っ黒。男にそっくりだ。マミヤは手を延ばして幼児の頬をつつく。
「わすれてません」
幼児は心底、うれしそうな顔を見せた。
「さ、ママが抱っこしましょうか？」
「ううん」、と幼児は男にしがみついた。
「まー、ふたりは仲良しなのねー」
「うん。ぼくたち約束したから」

「どんな約束？」
「パパはぼくに名前をつけてくれる。ぼくはそれを受け取る。それからずっと仲良く暮らすんだ」
　回らない口で、いっしょうけんめい言う。
「それはうらやましいわ」マミヤはちょっと拗ねる。
「ママとも約束したよ、わすれちゃったの？　ママはぼくを産んでくれるんだよ」

138.

　雨は一昼夜降り続き、マミヤはその間ずっと眠り続けた。夢を見ているらしく、わけのわからないことをつぶやき、泣いたり笑ったりしていた。
　いったいどんな夢をみてるんだろ、とイリチヤは思った。まあ、きっと、故郷の思い出かなんかだろう。

　雨音がしなくなって、彼は岩の隙間から外をうかがった。夜明けが近いらしい。空が明るくなりかけているのか、周囲の様子がなんとなくわかる。上着を脱いで丸め、マミヤの枕にしてやり、外へ出てみる。
　地面に深く水が溜まっているのに気がついて靴を脱いで裸足になる。周囲の様子がなんとなくわかる理由がわかった。一面、白一色なのだ。いったいどういう土地なのか、どこまでも白い色がうねっている。その辺を歩きまわっているとマミヤが起きて来た。やっぱり裸足だ。「なんか、ヌメヌメするわね」と、歩きづらそうだ。「ヌメヌメだけど、危険じゃない、そんな気がする」と彼女は断定し、イリチヤは笑った。「ぼくもそう思う。たぶん、今はね」

「どういうこと？」
「見て」と彼は地平線まで何もない白い平原を指さした。「まだ夜明け前なのにこの明るさだよ。太陽が出たらどうなると思う？」
「……すごく、眩しいかも」
「うん、目が見えなくなるくらい眩しくなる」
「てことは、ぐずぐずしてられないじゃないの」
「そういうこと」

　柔らかくぬめる白い土地には、歩き回った彼らの裸足の足跡が刻まれている。イリチヤは上空を旋回してみたが、白は地平線の向こうまでうねっていた。動く物がひとつもない。太陽が顔を出せば、反射する光と熱で生物が生きられない世界だった。広大な石灰岩の大地。その広がりは地上だけのものではなく、太古から未来へ永遠のごとく存在する。
　ふたりはなんの未練も感傷もなく一夜の雨宿りの地を飛び立つ。

　豪雨がもたらした水はこの白の地の南に広がる湿地帯を増水させ、ワニの群れは活動域が広がって大喜びしていた。

　何ものも生きられそうにない過酷な地にも、水の恩恵さえあれば生命が顔をだす。ちょっとした窪地や岩と岩の隙間から植物の芽が現れ、あっという間に小さな花を咲かせる。つかの間の生命を謳歌しながら、花々は噂し合った。「水の精霊のしわざだ」「水の精霊が雨を運んだのだ」、と。

139.

　巨大な四角推型の石の建造物。メッサナ総督府の航空機発着場にイリチヤはふわりと舞い降りた。早朝の空気はしっとりしていて暖かい。地上からかなり高いところにある発着場からの見晴らしは抜群、整然とした町の眺めにマミヤは嘆息しつつ、両手を思いきり突っ張って伸びをしていると、いきなり腕を掴まれて引っ張られた。

「な、なによ」
（しっ）
「……？」
（静かに！）

　イリチヤは体毛を逆立てた野生棒物のように体中をアンテナにしていた。なにかおかしい。人の気配がないのだ。建物のなかには居住区があって大勢の人が住んでいるはず。まだ寝静まっている時間ではあるが、その眠っている気配、生命の気配が、感じられない。

　慎重に歩いていたイリチヤはやがて走り出した。目指す先は総督の執務室、そこへ行けば――

＊

　そこで彼は自分の目を疑った。しろがねに輝いていた壁は剥がされ、石がむき出しになっているではないか。タペストリは傾ぎ、部屋を仕切っていた繊細な織物は床に落ち

て埃か何かのようにうずくまっている。飾り机の上の香炉はパンテオラの自慢のコレクションだったはずだが、ごっそりとなくなっている。戸棚の扉はあらかた開いていて中は空っぽ。まるで……略奪のあとだ。いや、ほかに考えようがない。
　この部屋で統治者パンテオラに挨拶したのが記憶違いのようにさえ、イリチヤには感じられた。すべてが穏やかに誇り高く光り輝いていたあの日はついこの間のことなのに。

　マミヤは室内の荒らされようを一目見て立ちすくんでしまい、中に入ろうとしなかった。そして、ふと足元に目を落とすと――
　イリチヤもそれに気がつく。廊下の床に、黒い粉のようなものが散らばっている。マミヤがしゃがみこんで目を近づけて言った。「これ、黒曜石だわ」大きくごつい靴に踏まれて黒い色があちこちに散っていた。

「――コモラさん――」

　イリチヤはぶるっと身震いした。

140.

　ぼう然と黒い破片を見つめていたイリチヤがふと顔をあげて立ち上がった。「マミヤ！　ついてきて！」

マミヤは少女ながら結構な俊足だったがイリチヤはもっと足が速かった。建物内の廊下の角をいくつかまがり、階段を駆けおり、突き当りの扉をそうっと押し開けるとそこは外の世界だった。周囲の様子をうかがってするりと扉を抜ける。見ればイリチヤはもう先を走っている。扇の骨だけのようなふしぎな形の葉っぱの植物がうっそうと茂っていて、一瞬でも気を抜くと姿を見失ってしまいそうだ。

ちょっと！　待ってよ！　そう、考えただけだったが、イリチヤが速度を緩めて振り向いた。マミヤが追いつくのを待って、再び走り出す。気持ちがつうじたのかしら、とマミヤは思った。それにしてもどこまで走るつもり？　シュロの木々はますます生い茂り、うっそうとし、まるで太古の森だ。

ふいにイリチヤは立ち止まる。走り通しでさすがに息が上がってしまったマミヤは喘ぎながら地面に手をついたが、イリチヤは平気だった。体をマミヤの方に向けているが背中は何かに……壁に……もたれているように見えた。
「マミヤ！」とイリチヤが呼んだ。片手を差し出している。マミヤが思わずその手につかまると――強い力に引かれるのを感じ、イリチヤの体が壁の中に吸い込まれていくのを見た。

次の瞬間、彼らは壁を素通りし、家の中にいた。

　テーブルを前に腰かけていた者が、がたっと音を立てて立ち上がった。ぎょっとしたように身を固くし、目を見開いている。

「やっぱり！　ここだった！　コモラさん！！」
「なんと！　イリチヤではないかね！！」

＊

「ここはコモラさんの秘密基地さ」
「そう、私の隠れ家だ。厳重な結界が張ってあったのに、よくここがわかったもんだ。勝手に入ってくるし。おまえが魔法使いだとは知らなんだよ」
　老人はふたりを座らせ、熱いチョコレートをすすめた。
「パンテオラさまの部屋の前に黒曜石の破片がぶちまけてあった。あれ、市場でコモラさんが買ってくれたやつだ。そうでしょ？」
「うむ……兵士ともみ合いになってな……」
「兵士と！？　どういうこと！？」
「アンベレオ本国から派遣されてきた連中だ。メッサナ市で起こった騒動を調べに来たのだ。いや、おそらくそれは口実だ。総督府で働いていた者は家族ごと連れていかれた。パンテオラさまもだ……」
「連れていかれたって、どこへ？」
「本国だ、アンベレオ本国。こんなことは前代未聞だ。いきなり本国の兵士が乗り込んできて……パンテオラさまも寝耳に水のことで彼らと口論になり、私に、逃げなさいと目配せをなさった……しかしひとり逃げるなど、できるわけがない、私はできないと必死に目で応えた。
　するとパンテオラさまは兵士たちにおっしゃった。同行する。が、若干の私物の持ち

出しを認めよと。私に、準備してくれ、というのだ。いうことを聞かぬわけにはいかぬと観念した私はついに了解し、パンテオラさまの住居へ向かった。せめて身の回りの世話をしている者たち十名をなんとかしてやらなければと……

ところが……その者たちの控えの間がもぬけのカラだった！　交代で何人かが常に詰めているはずなのに、ひとりもいないなどあり得ない！　いち早く逃げてくれたのならよいが、まさか……私の頭は嫌な猜疑心でいっぱいになった。しかしそれは当たってしまった。パンテオラさまの装身具を納めていた箪笥のなかが、空っぽになっていた！

カギ？　そんなものはかかっていなかった、メッサナにそんなものは必要なかったからだ。

頭の中が真っ白になり、ぼう然と立ちすくんだ、その時、執務室で騒ぎが起きた。私物を持ち出したいといっておられたパンテオラさまご本人が、兵士を挑発したのだ。そのどさくさに紛れて私は……」コモラは低い声で告白しながら両手で頭を抱えた。

マミヤは事情がよく呑み込めないながら、悲嘆にくれる老人が気の毒で、立ち上がってその背に手をまわし、撫でさすった。

142.

礼をつぶやき、コモラはさらに続ける。「不穏の兆しはあったのだ」、と。絞り出すような声で。

「イリチヤよ、覚えているかね、町の広場で歌を歌っていた娘のことを」

「覚えてる、忘れられないよ、メルノという人だろ？　彼女が歌うのを大勢の人が泣き

ながら聴いてた」
「そのメルノの行方が知れない」
「どうして！？」
「それが――わからない。ある時、彼女の歌に、聴衆がいっせいに怒り出したのだ。彼女に罵詈雑言を浴びせ、石をぶつけ、食べ物を投げつけた。あまりのことに驚いたメルノは歌うのをやめ、人々の前から姿を消した。しかしそれで終わりにはならなかった。人々は市場で、学校で、工房で、家庭で、事あるごとにメルノを誹謗し中傷した。私も街中でそれを耳にしたが……聞くに堪えない、えげつなく、みだらで、おぞましいものだった。
　あの年齢の女学生がそれほどの中傷を受ける理由があろうかと私は思った。おそらくすべてが虚偽で、事実無根に違いないと思った。誰かが彼女を陥れようとしているのではないかと思った。……そのような考えを持つ者を、多くの人々は黙って見つめた。みんなが黙って自分を見ている、そんな場に立ってしまった者は自分の考えを口に出せなくなる。圧倒的な多数が異なる意見を封じてしまう。うっかり主張しようものなら、こんどはお前がメルノと同じ目に遭うのだと、暗黙の圧力が存在した。おそろしい雰囲気だった……」
　コモラはテーブルから水の入った器をとって口に運んだ。水のほとんどは胸元にこぼれたが彼は気にしていない。憑かれたような目で言葉を紡ぎ続ける。

「そして、その日の宵、火事が起こった。学生たちの住む集合住宅が燃えた。メルノはそこに住んでいたらしい。多くの学生が焼け出された。燃える建物をこわごわ眺め、彼らは口々にメルノのせいだ、と。やがて気を取り直した彼らは三々五々、ある場所に向かった。メルノの実家だ。彼女の親兄弟姉妹が住んでいたという。その家も燃えた。全焼だった。メルノ本人も彼女の家族も、どうなったかはわかっていない……行方不明だ……」

　耳を傾けていたイリチヤも、マミヤも、気分が悪くなってきた。あまりにも、異様な話だった。

143.

「おまえが急にいなくなって」コモラはイリチヤに言った。「心配していたのだ。今度のことと何か関係があるのだろうか、それとも……」

　イリチヤはふるふると頭を振った。「僕はマミヤを助けに行ってたんだ。帰ってきて総督府へ行ってみたら誰もいなくなってて……ごめん、心配させちゃって」

「そうだったか……おお、あなたがマミヤさんか！　いや、気が動転して私は自分の事ばっかり……申し遅れた、私はコモラと申す。あなたのことはよく聞いておりますぞ」

　初対面の老人から丁重な挨拶を受けたマミヤは面食らった。「は、はい、私はマミヤといいます。あの、あたしのことをよく聞いてた、ですって？」マミヤはうたがいの目をイリチヤに向ける。

「はは、ヒューダーからですよ」思いがけない名にマミヤは思わず息を呑んだ。
「ヒュ、ヒューダーが、あたしことを！？」

「彼女がトラブルに巻き込まれたのは、自分のせいなのだ、とヒューダーは。一刻も早く助けに行かなければならない、自分には責任があると」

　マミヤはびみょうな顔をする。（あ、そういうことなの）

「彼はしばらくメッサナにいたことがあります。なんといっても学問の都、とても熱心に勉強していました。十代のころの話です。わき目もふらず勉強にはげんでいましたっけなあ。同じ年頃の娘さんたちもたくさんいて、彼に関心を寄せる子もいたのですが、ヒューダーはまったく目に入っていないようでした。だから、まあ、本当に学問以外に関心がないのだろうと私は思っておったのです。

　先日、何年振りかで会ったとき、はて？　と思いました。ずいぶん様子が変わっていたものですからね。ここにいるイリチヤが原因かとも勘ぐってみましたが、どうもそうじゃない。話をしていて気がつきました。彼はとても多くのことを抱え込んでしまっている、と。自分の力や知識だけではどうにもならないことを」コモラはそう言ってうなずき、微笑んだ。

　狐につままれたような顔のマミヤを前に、コモラは年寄りがこれ以上言ってはいけないと思っていた。（これはもう、本人同士の問題だからな）

144.

　何食わぬ顔でヤスウはメッサナの町を歩いている。ほんのわずかな期間だが滞在したことがあるので道に迷うこともなく、リラックスした風体で歩き回る。到着後はまず、友人を訪ねようかと考えたが、それは後回しにした。とにかく、自分の目で町の様子を見てみようと思ったのだ。

　メッサナは様々な土地からきた人々が暮らしているので、人々の見た目はそれこそ様々である。どんな格好をしていても浮いてしまうことも目に付くということもないのだが、とはいえ、雑然としているわけではない。この大きな町を特徴づけているのは、明るい解放感と寛容さだった。どのような存在も認め、受け入れる社会だった。メッサナに馴染めない者もひょっとしたらいたかもしれないが、その者にとってさえメッサナの思い出は生涯を通じて大きな糧であり、傷であったり思い出したくない過去ではなかった。

（おれだってそうなんだよな）とヤスウは独り言ちる。（できることならここでもっと遊び、いやいや、学びたかった。何を、ってそりゃあ、いろんなことさ。たまたまダーヴェ先生のチームに合格しちまったもんだから、世界を股にかけることの方を選んだのさ。あ―懐かしーぜーこのシュロの並木道、あの曲がり角、マーケットで食ったひるめし！　そうだ、行ってみっかな）

　町の様子を観察することはすっかりお留守になっているヤスウである。たしかに空腹でもあった。最後に食べたのは祖父母の所で、食料の残り具合を気にしているようだったので、とても腹いっぱいというわけにはいかなかった。スクナにいえばなんなりと調達してくれたのだが″でかいおっさん″にそんなことができようとは考えもしなかった。それですきっ腹を抱えたまま旅立ってしまったのである。

（そうだそうだ、なにはともあれまず腹ごしらえだ！　さーて、なにを食おうかなっと――ん？――）

　マーケットの人込みの中、日よけの布を頭から被った少女がいる。布は頭だけでなく顔の下半分も隠していて目だけが出ている。果物を物色して目を下にむけているけれど、美しい目元だった。
　ヤスウはふと、胸がときめくのを覚えた。数日前に出会って別れた、あの娘に似ているような気がするのだ。

（どうかしてるぜ、似てるってだけでさ）

　苦笑しつつ、もうちょっとそばで見ようとヤスウは人を避けて少女に近づいていく。

145.

　少女は果物と野菜を買い込み、けっこうな量になった荷物を、よっこらしょ、と胸の前に抱えた。しなやかな背中の線といい、衣の下から伸びている素足の線といい、目元だけでなくほんとにあの娘によく似てる、とヤスウは思った。そこでつい出来心、もとい、親切心がふつふつと彼の内に沸き上がった。荷物を抱えた少女が歩き出し、マーケットの建物から出たところで、後ろから近づき、横に並んで、さりげない体で声をかけたのである。

「おじょうさん」と。「手伝いましょうか、いや、そのまえにその辺でお茶でも」

　少女は、はっと顔をあげてヤスウを見た。見開かれた目――、そして、顔の半分を覆っていた布がはらりと――

　ヤスウは凍りついた。相手も。

　ふたりの間で時間が止まった。

＊

ヤスウは赤い光のなかにいた。冴え冴えとした赤い光がヤスウを飲み込んだ。光は彼を見つめる。彼を囲繞する。彼は……裁かれるのを感じる。
灼熱の赤い光は精霊の怒りの放出なのだ。

＊

　次の瞬間。

「きゃあああああ！！」
　魂切る悲鳴をあげたかと思うと少女は同時に荷物を放り投げた。果物が地面を転がり、居合わせた買い物客らが驚いて追いかけ、ヤスウは大慌てで散らばった野菜を拾い集める。

（なにやってんのさこんなとこで！！）
（それはこっちのセリフでぃ！！）「お、おわびにおたくまでおはこびします」
「……💢」

146.

　憮然としたイリチヤが荷物を抱えた男を後ろに従えて帰ってきたのを見て、コモラもマミヤもあぜんとする。

「おかえんなさい、ごくろうさま。えっと……そちらは？」
「ただいま！　もーさんざんだよ、マーケットでつきまとわれてさ」
「だ、だれがつきまとったって！？　おれはただ――」
「『おじょうさん……』とかなんとか、声かけたのは誰だよ、その前からずっとへんな視線を感じてたんだ！」
「そうかそうか、ヤスウ、イリチヤの美少女ぶりに目がくらんだな」
「あ、コモラのじいさんじゃねえか。久しぶり。なあ、こいつはなんで女みたいな格好してんだ？」
「ぼくは町の様子を見に行ったんだ！　コモラさんは兵士に見つかるとまずいから、ぼくが！　そしたらおかしな奴にナンパされた！」
「なんだとこのやろー」
「まあまあ」

147.

「な、なんだって！？　メルノを、ヤスウ、おまえが！？」

　ヤスウはメッサナの北の湿地帯で見つけた娘がメルノと名乗っていたこと、彼女を安全な場所へ移してきたことを話した。コモラは安堵のあまりへなへなとその場に座り込んでしまった。

「その娘は、得体の知れねえとんでもねえ悪党に目をつけられたんだ。おれも危うく巻き込まれるとこだった。けどもう大丈夫だよ、ある人が安全を保証するって請け負ってくれたから。ただ、それが誰で、彼女がどこへ行ったか、聞かねえでほしいんだ。おれらだけの秘密なんだ。そういう誓いをたててきた。彼女に目をつけたのは、おっそろしく危険なやつだってことを知ってほしいんだ――」
　ヤスウは真剣な目でコモラを見、イリチヤを見て、訴えた。

　コモラはヤスウの日焼けしてない部分のある左手首を見た。ヤスウ自身のネウトラ評議会の証でもって娘の身分を保証したのだという。

（そういえば、ヒューダーも持っていなかった。ケストル王国で取りあげられたとか）

　長い歴史の末に、評議会の威信はとうに地に落ちてしまっていたが、それでも彼らは世界のために駆けていた。その証を取り上げられ、あるいは自ら手放しても、彼らの思いは変わっていないらしい。

（もっとも……そう叩き込んだのは私だが……ヤスウが己の身分証明書を使ってまで娘の身の安全を講じたのなら……）

コモラは、ヤスウと協力者を信じようと、そう思った。ヤスウが手を貸したという娘の人相風体を聞くには及ばないと思った。

もし――コモラが――詳しく問いただしていたら、ヤスウがマーケットの雑踏の中からイリチヤを見出したことにはそれなりの理由があったことを、知ったはずだった。

第八章『イリチヤ』

第九章へ続く

第八章のあとがき

第八章までやってまいりました。読んでいただきましてありがたい限りでございます。

サブタイトルは『Iritiya』。第三章でそう名付けられた本人が『i（アイ）がみっつも続いて、言いづらい』と文句を言ってました。オーストラリアはアボリジニの言葉で、『槍』という意味です。主人公のはずなのになかなか出てこない。たぶんこれから出番増えるんじゃないでしょうか（他人事みたいに）
ヤスウとは仲が良くないイメージがあったんですが、そーゆうことだったとは。ええまあ、書いてみないとわからなかったりするので。

さて、何度読んでも頭に入らない本、というのがミネムラにはありまして、そのひとつが『音楽の本質と音体験』（ルドルフ・シュタイナー著）。まあ、元々、本として書かれたものではなくて講演から書き起こしているというのもあるかもですし、ミネムラ自身音楽、聴く以外は門外、平易な言葉で語られているにもかかわらず、頭に入らない。でもどーしても読みたい。なんでかというと、太古の音楽について書かれている箇所があるからです。

〝 当時（アトランティス時代）の音楽体験はすべてが七度（CDEFGABのC－B、ドレミファソラシのドーシ、ハニホヘトイロのハーロ）に基づいていた。つまりすべての調べが終始七度に基づいていました。現代人には音楽とは思えないものです。

当時の七度体験の特徴は、この体験をしている時、人間がいつも完全な忘我状態にあった、というところにあります。地上の束縛から解かれるのを感じ、自分が別世界にいるのを感じたのです。

もしこの時代の人間が言葉で思いを言い表わしたとするなら、「私は自分が霊的世界にいるのを感じる」というのと同じ意味で「私は音楽を体験している」と言ったことでしょう。

根本的に音階体験すべてを有する七度体験において、人間は統一的な、地上に立つ存在と感じていました。ついで人間は七度体験において自分の外に出ました。人間は世界のなかに自分を感じたのです。音楽は人間にとって、世界のなかで自分を感じる可能性を提供するものなのです。人間は音楽を通して、自分が単に地上に生きる人間であるだけでなく、地上から離れた人間であることを理解したのです。

この七度体験というのは現代人には（未だ）理解しがたいものです。

（…人間はいくつもの多元的な構成体から成っているという考えが基にあるのですが、アトランティス人は現代人とは異なる構成をしていて、現代人のようには物質界を感じ取っていなかった…）

アトランティス時代以降、人間が物質に沈降する過程で七度が苦痛になり、五度を心地よく感じ、さらに個別化の過程で三度を体験する。（二度、一度についての言及もありますが……特殊な体験になるらしい）そして将来、オクターブ（八度）を体験することで太古の人々の音楽体験を理解できるようになるでしょう。
それは、音楽を体験することによって、地上の自然ではなく、宇宙を貫いて活動し生きるものに私が結びつけられる感じであり、オクターブ（八度）を体験することによって、あらたに私の（高次の）自我を見出すことなのです。 〝

本作では古代が舞台でメルノが音楽家ということでありますが、上記の事柄は関係ないです。ただ、『高次の自我を見出す』、というところに無性にそそられるのですね。それ、肉体と魂の関係かもしれない。でもって、ずっっっっーと後の世界で、イリチヤを魂とするひとりの少年の話を――

2022年5月16日　記

奥付

Salamander in the circle
　第八章　イリチヤ

2022年5月20日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail
表紙素材　「月とサカナ」http://snao.sakura.ne.jp/
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社